

WOMANSPIRIT

No.8 August 1989

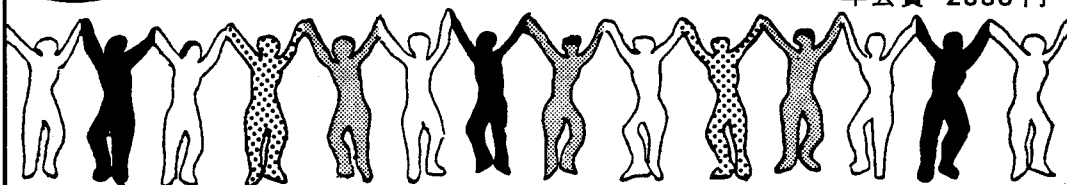
逐次刊行物

平成元年 9月 6日 成立

国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

フェミニズム・宗教・平和の会

年会費 2000 円



連絡先 関東 〒281 千葉市宮野木町233-53 奥田 暁子 ☎ 0472(52)1167 郵便振替 東京 7-8031
関西 〒612 京都市伏見区深草大亀谷八島町17 メゾン鎌田101 源 淳子 ☎ 075(642)4047 郵便振替 京都 6-31178

目次

キリスト者となれなかった者の告白	山田 恵子 1
リタ・グロスさんに期待する	鶴岡 瑛 2
女と国家—観念による呪縛—A『古事記』(5)	河野 信子 4
魔女狩り(3) なぜ女性がいけにえとなったのか	奥田 暁子 4
男からの逆襲・限りない女の墮落を前にして	福島ひとみ 6
第三世界女性会議に参加して	申 英子 7
さて、これからが……	岡崎 公子 9
連帯と希望の歌を!	岩田 澄江 11

キリスト者と なれなかった者の告白

山田 恵子

6歳の時祖母が亡くなったことが、私にとっての宗教の始まりだった。

今まで毎日一緒に暮らしてきた人がある日突然そこにいなくなるということは、6歳の子供には言いようもない不安だった。ある夜夕食の丸いテーブルを囲んでいるとき、私は突然泣き出した。「死ぬのはヤダ!」

その時の母の答えは実に名言だった。

「人間は誰でもいつかは死ななければならないの

よ。でもね、今すぐに死ぬわけじゃなくて死ぬまでにはいっぱい時間があるから、そんなに心配しないでいいの。」

それ以来、私はいつも「死」を意識しながら生きてきた。そこから逃れるには宗教しかなかった。宗教に入る人のきっかけは大まかにいって、罪の意識と死の恐怖に別れるそうだが、私は後者の典型である。

小学校1・2年の頃教会の日曜学校に通い、15で初めて礼拝に出席し、20歳でプロテスタントの洗礼を受けた。なぜキリスト教だったのか。当時も今も変わらないが、キリスト教は結婚式のイメージで、仏教は葬式のイメージだったからだ。キリスト教は清貧で仏教は金儲け。西欧のバタ臭さ、

開放性も幼い私の心を捉えた。当時の私にはキリスト教こそ明るくモダンで、唯一の正しい宗教のように思えた。人生の一大問題はすでに解決されたはずだった。

その明るく正しい教会生活も、受洗後たった2年しか続かなかった。教会の教義はじわじわと私の行動を規制し、私は息が詰まりそうだった。決して誰彼が言葉で私に強制したわけではない。けれども自己規制せざるをえない無言の圧力が教会にはあった。

そんな漠然としたうっとうしさの中で、教会を去る直接のきっかけとなったのは、恋愛と結婚問題である。私の所属する教会では教会の教義にかなう人、少なくともプロテスタントの教会員であることが結婚相手としての条件だった。母教会の意向もあって出席していた教会では、

「恋愛結婚は認めていません」とも言われた。

もう「イエス様」の名の下に教会の教義を押し付けられるのは真っ平だ。他人の意向を窺うのはたくさんだ。私は自分の人生を好きなように生きたいのだ。

やがて結婚して子供が生まれ、平凡な主婦業に就いている頃だった。何故かしら体調を崩してどんどん体重が減っていった時、私は再び「死」を意識した。はたして私はクリスチャンなのだろうか。受洗当時お世話になった牧師が近くの市の教会を牧していたので、私ははるばる訪ねていった。

「先生、私のお墓はどうなりますでしょうか」と尋ねた時、I牧師は一瞬驚いた様子だったが、一つの決断をするかのように答えた。

「私の責任で、あなたを教会のお墓に入れてあげましょう。でも、あなたは、お墓に入る前に、天国に入らなければなりませんよ。」

私はI牧師の言葉に、思わず涙があふれそうになった。そうか、私は地獄に行くことになっていたのか。I牧師には何度迷惑をかけたことだろうか。彼は七度の七倍まで許してくれるだろう。もう一度だけ、明るく正しいクリスチャン生活を送ってみよう。

こうして私は再び近所の教会に通いはじめた。4・5回通い始めた頃だろうか。そこの教会の牧師が、

「教会に来ながら、神の御言葉を聞きながら、その御言葉を信じない人は罪です。」

という説教を礼拝でしたとき、私ははっきりと目

が醒めた。私は二度と礼拝には出席するまい。それ程に我々人間には主体性がないというのだろうか。この強引さでキリスト教はどれほど世界の他宗教を弾圧し、人々を殺してきたことだろうか。

別の牧師はこのことを「他人に自分のゲタを預けるというやり方ですね」と批判していた。

やがて体調も元に戻り、頼るべき所もなく一人で本をよんでいくうちに、私はひょんなことから仏教に出会った。以前、I牧師に「仏教とは、哲学だと思います」と言われて以来、私自身も哲学だと考えてきた釈尊の教えは、この時から私にとっては哲学以前に宗教となった。日本ではすっかり死に絶えていたと思っていた仏教は、まだかすかに呼吸していたのだった。

キリスト教は「信じるか、否定するか」二者択一の容赦ない厳しさで常に私に迫っていた。けれどもこの時から「そういう一つの宗教」という、私にとっての第三の選択肢となった。なんという救いだろうか。長いキリスト教の束縛からの解放だった。

初めて日曜学校に通って以来、実に20年の歳月が過ぎていた。未だに私の口からは長い間馴染んできた「イエス様」という言葉が洩れる。

リタ・グロスさんに期待する

鶴岡 瑛

前号の源さんの「リタ・グロス講演会報告」を興味深く読ませて頂いた。源さんは彼女が、仏教を「根本的なもの」と「社会的に制度化されたもの」に分け、女性差別については後者の「制度化されたもの」には問題があるが、前者には差別がないとすることを二元論的な分け方と呼び、そのことが巧妙に性差別を見えないものにしていてと批判されているようである。

私はリタ・グロスさんとは一面識もなく、彼女の仏教についても何の予備知識も持たないものですが、源さんの文章を通して見る限り、グロスさんの目指している方向は私の模索してきたものと重なるようですので、私自身が仏教とフェミニズムを融合させる道を確認するためにも、源さんの批判に対して感じる疑問点をここに提出してみたいと思います。

最初に二元論的な分け方はいけないとの批判に

ついでですが、「根本的なもの」とは教え—理念—思想を指すのであろうし、それは言葉や文字によって指し示されることはあってもあくまでも形を持たぬものである。また「制度化されたもの」といえば、教団、寺院から一人々々の僧侶の有り方までも含む非常に広範囲なものと思われる。このようにまったく次元の異なるものを一つのものとして考えることは私などには不可能です。

源さんのいわれることは、現に「制度化されたもの」に差別があるのだから、「根本的なもの」をひっくるめた「全仏教」に責任がないとすることはできないということではなかろうか。それはフェミニズムの立場から仏教全体を黒か白か判定することであって、それも現実「制度化されたもの」に差別があるのは明らかだから、初めから黒という判決が下ることに決まっている筋道のように思われる。フェミニズムの立場から仏教（宗教）を批判する方法としては明解であり、有効かも知れませんが、そこから仏教（宗教）とフェミニズムの取り組みについてどんな展望が開けてくるのでしょうか。それも一つの方法だし、この会としてはそのような立場も有り得ると思いますが、しかし信仰に立って仏教とフェミニズムの融和の道を探ってゆくものとしてはそのような方法を受け入れることはできないと思います。

また「分ける」ことがただちに「聖と俗」というような対立的な原理で仏教を二元化することにもならないと思います。それよりは「根本的なもの」はあくまでも形を持たないものであるし、また「制度化されたもの」も単なる世俗の組織ではなく、（幾分かでも）仏教の理念をこの物質世界に具体化したものと見るべきであって、仏教的な見方によれば両者は一つではなくまた二つでもないといえると思います。

そのように踏まえた上で、差別の元を探る方法として私はグロスさんと同じような分け方をしたいと思います。源さんは二つに分けることで差別が見えなくなるといわれるが、私は反対にそれらを一つと見なすことが組織の中に差別を容認する人達の権威付けに利用されていると思っています。「制度化されたもの」はどんな崇高な理念に基づくものであっても、あくまでも人間の組織であり、必ず誤りを含みます。けれども両者が一体化して神聖視されているところでは制度上の誤りに対する批判さえ許されなくなります。私は日本の仏教

が教えとして立派なものを持ちながら、同じ号に菱木さんが記されているような状況に低迷しているのも、長い間両者の混同、一体化が積み重ねられた結果、権威にあぐらをかいて他からの批判を許さず、仏教の基本である内観（自己省察）もなおざりにする体質ができあがったせいではないかと思います。

あくまでも源さんの要約によっての上ですが、私がグロスさんに共感するのは、彼女が文献によって仏教を分析、解釈、批判しようとせず、瞑想によって自ら仏教の根本を実証し、その中から主体的に仏教フェミニズムを創っていかうとする姿勢にあります。もちろん文献を学問的に精密に研究することも大切ですが、私は文献の中に仏教とフェミニズムの決め手となるものを見つけ出すのは無理ではないかと思っています。なぜなら同じ仏教といっても経典、文献は長い期間をかけて作成されたもので、各宗派毎に様々な（ある場合には矛盾する）表現、主張を持ち量的にも膨大です。その中からある一部をもってきて女性差別の有り無しの例証とすることは無理ではないでしょうか。また言葉、文字によって表現されたものは当然ながらその言葉、文字を用いる人々の価値観や偏向、時代の制約などを反映しています。今日まで仏教を推進してきた主体は男性で、今日のような女性問題は意識にも上っていませんから、男性によって「表現されたもの」としての経典、文献がある種の偏向を持つのも無理からぬことといえます。問題なのは今日女性からその問題を指摘されても、「根本的なもの」に照らして対応することのできない僧侶の不勉強でしょう。

グロスさんが自身の修道の中から「根本的なもの」には差別がないと信じているように、私も仏教の根本は女性差別に限らずあらゆる差別を含めると確信しています。今私達がなすべきはできるだけ多くの女性が自分自身の求道の主体となって教えの根本に参入し、そのことを女性自身の言葉で書き表してみることにと思います。できるなら女性の表現による経典を目指してもよいと思います。もともと大乘経典はそうにして成立したものですから。それには数多くの男性僧侶が長い歳月をかけ、ある人の業績を（ある場合に批判的に）継承し発展させてきたように、息ながくじっくり続けることでしょう。アジアの仏教と西洋のそれ
(p12へつづく)

女 と 国 家

——観念による呪縛——

A『古事記』(5)

河野 信子

若い女 「然れどもくみど興して生める子は、水蛭子。この子は葦船に入れて流し去てき」。この部分、かなり多様な想念と事態へのイメージを引き起こしてしまいます。水蛭子の文字をいまこのままに受けとるといたしますと、「ひるのような骨なし子」ということになりましょう。無重力状態では、鶏卵はひよこになりません。背骨の形成に重力が関っているからです。宇宙船内で実験もされました。進化の過程に対する何らかのメッセージに思えてならないのです。まさかこの時代に、といたいのですが、神話は、「なぜ」と現象にむかって問いかける危険をあえて犯し、観相の糸をたぐりながら、世界中をめぐるところがありますので、雲を見、水を見、沼地の生きものたちをみているうちに、地上のどこかで、思弁と観相がいりまじったりして、「水蛭子」と人間の間の、はるかな時間を語りたくなったのではないのでしょうか。人の意識のどこかに、「水蛭子」が潜在していなかったら、宇宙船のなかで卵をかえして見ようなどといった実験も思いつかなかったかも知れません。

老婆 なるほど、人の意識史のなかには、ダーウィン以前の進化モデルが、ずっと昔から、点滅しながら、さまざまな語り口で、世界にちらばっていたとおっしゃりたいのですか。楽しいですね。因果はめぐる糸車。おかげさまで、全地球をおおう、宇宙糸車みたいなものが浮かんでまいりました。ただ、この時代の文字をあまり信用できないという人もいます。民族の観念と文字のあいだにはずれがあった。文字いまだ定着せざる時代のものであって、「ひる子」は「日の子」「ひる女」は「日の女」、(るはののことですから)といった説もあります(松本信広氏など)。稗田阿礼は、どちらも想っていたのでしょう。姫彦制の習慣と制度と意識が、深く織りたたまれた国です。やはり対でなければ、この世は、成り立たぬとすれば「日の子」と「日の女」のほうも気になります。対を破っては苦しみ、さらなる対を生み、また破らずにおかぬ

といった過程を繰り返す民族ですから。

若い女 「水蛭子」ならば、生物進化のメッセージ、「日の子」ならば、太陽神信仰、私、どちらも抱えこみたくまりました。ここで、不快感を誘うのは、「流し去てき」とつづく部分です。権力をもってしまった民族が、生体に上下・善悪を描く発想を身につけてしまったのちに書きこんだことでしょうか。

老婆 あなた様の語りぶりに乗せていただきますと、現代のメッセージは「ボイジャーに乗せて放り去てき」ですか。現代のテクノロジーが教えてくれるものからふり返りますと、「去てき」といった意味は複雑に折りたたまれていてもおかしくありません。「日の子」を葦船(天磐船)に乗せて「あま」(海・天)に放ったといった説も意外に多いのです。「次に淡島を生みき。こも赤子の例には入れざりき」とつづきます。父権制型思考に染まってしまった私たちは、この部分も、「私生児」とか「異常分娩」を連想するといった、観念の罠に落ちていきますが、語り部の女たちが、先祖から伝えられた心には、子の所有について許されることか、許されざることかと問うものもあったのではないのでしょうか。天と地の媒介として生みだしたものを「子」として所有することは許されずとするものも。

若い女 天の子、地の子、己れの子。「我が子」の観念に反りかえるなよといったメッセージととってもいいわけですか。権力の周辺にいたものたちといえども、精神の墮落にたいするおそれは、いまよりは強かったでしょうから。ただ次につづく部分は気になります。時代の複合が感じられますので、すこし「虫とり」をやってみたくります。

魔 女 狩 り (3)

なぜ女性がいけにえとなったのか

奥田 暁子

魔女狩りについてはヨーロッパの歴史学者や社会学者によって膨大な書物が書かれている。その原因についても、民族国家抬頭説、宗教改革説、キリスト教対異教の対立説、周縁説、人口変動説(单身女性の参加)など、さまざまに説明されてきた。そのどれもがもっともな要因と思われるが、しかしこれだけではなぜ主として女性が被害者となったのかを説明しない。魔女狩りの犠牲者は圧

倒的に女性であった。男も「魔女」の疑いをかけられることもあったが、ごく少数であったし、その場合でも、魔女とされた女性となんらかの関係をもっていることが多かった。エセックスでは92%の女性が、ラインランド地方のランゲンドルフでは2人を除く全女性住民が「魔女」として逮捕された。平均して80~85%が女性であった。この数字を見ただけでも、魔女狩りは「女性狩り」であったことがわかる。そこで今回はなぜ女性が標的となったのかを考えてみよう。

1 異端運動と女性

魔女狩りに異端排撃運動が先行したことは前にも書いたが、異端運動と女性との間には深い関わりがあった。キース・トーマスは「マニ教からヴァルド派まで、ドナティウス派からカタリ派まで、中世の宗教分派のほとんどすべては女性たちから大きな支持を受け、彼女たちを時には有力なパトロンとして……だがもっと多くは、事実上男性と対等な活動メンバーとして、喜んで受け入れた」と書いている。網野善彦は日本の中世には無縁の集団に女性が数多く参加していたと言い、女性の性そのものに無縁な特質があったからだとしているが、女性の「無縁性」はこの異端運動の女性にも当てはまるのではないだろうか。異端運動に参加した女性たちは家族を離れてそのメンバーとして行動するなかで、より大きな自己体験を得、またそのあいだに禁欲生活を続けることによって家族の絆から自らを解放していった(トーマス)。このような女性たちの活動に対して、カトリックの忠実な信者たちは、サタンが女性の手を借りて行動しているのだと考えた。魔女狩りが始まる以前にすでにその下地はできていたわけである。

異端分派が女性たちを引き付けたのは、彼女たちがそこに体制的な宗教にはない解放のにおいを嗅いだからであった。男性に従属させられ、沈黙させられていた女性たちが、そこでは男女の別なく行動し、聖書の言葉を語り、祈ることができた。おそらくこのような運動に加わった女性たちは、J. B. ラッセルも認めているように、教会から排除された女性たちであり、現実には大きな疎外感を感じていたのであろう。しかし同時に、彼女たちは自ら進んで異端運動に身を投じ、それまでの環境からの脱出を願ったのであろう。

2 家父長制社会の逸脱者

16世紀後半から17世紀にかけて(魔女狩りの最盛期)はヨーロッパ社会に家父長制家族イデオロギーが浸透した時代である。阿部謹也はドイツでは15世紀末に女性の社会的な地位が変化したと指摘している(『中世の再発見』)。それによると、14世紀までは女性たちはまださまざまな職業に就いていた。ドイツではツunftやギルドにも女性のメンバーが入っていた。ところが15世紀になると人口が増え、女性の就労の機会が減り始める。そして職人層から婦人労働を禁止しろと言う声が出てきた。16世紀の始めにできた「諸身分の絵」に女性が一人も入っていないのはちょうど婦人労働が禁止された時期と一致し、女性は家庭にいるものだという主張がでてきたからだという。もちろんそれ以前からヨーロッパは家父長制社会であったが、それほど徹底してはいなかった。キリスト教も民衆の日常生活の隅ずみまで縛っていたわけではなかった。しかし明治期の天皇制家族国家が国家存立の基礎を戸主を頂点とする家庭の和に求めたように、民族国家の出現は国内を統率するイデオロギーを必要とした。ピューリタニズムは社会秩序維持のために家族内の調和を重視した。結婚、家族、家政に関する細かな規定が教会によって作られた。その基本になったのは女を男に、子どもを大人に、使用人を主人に従属させるアウグスティヌス以来の創造の秩序論であった。しかし、それぞれの役割にしたがって家庭内の和を守るというピューリタンの理想は、他面で、女性が権威に対して反抗することを恐れていた。もし反抗する女性があれば、それは悪魔の仕業でなければならなかった。なぜなら、もともと従属的な女性は、悪魔(男性)の誘惑にも従いやすいから、というのである。

M・デیلیーは家父長制社会の秩序に同化しない女性たちが魔女にされたのだと推測する。結婚を拒否したり、やめめとなった女性、あるいは夫がいても夫を支配しているように見える女性は家父長制社会の秩序を脅かす存在であった。肉体的、知的、経済的、道徳的、精神的に自立した女性は男性支配の社会からの逸脱者と見られた。

学者のなかには、魔女狩りを引き起こしたのは神学者や法律家などの上からの力でなく、民衆による下からの力もあったという立場に立つものもいる。確かに隣人の女性による告発も多かった。

しかし天安門広場における市民の民主化要求を徹底的に弾圧した後に、中国の権力者が密告を奨励していることから分かるように、民衆同士を敵対させることは権力者のとる常套手段である。家父長制社会にあっては、女性は男に依存してしか生きられない。そのような立場にある女性にとって男を脅かす存在は女性にとっても脅威であった。いつの時代にも、抑圧されている人びとはあまりにも抑圧が激しいとそれをはねのけるよりも、かえってアウトサイダーを作り出し、抑圧を肩代わりさせようとしがちである。したがって、「魔女」が隣人の密告によって大量に生み出されたのはなによりも家父長制社会の非人間性を物語るものである。

3 女性嫌いの伝統

キリスト教はイヴ以来女性に対する偏見を育ててきた。蛇に姿を変えた悪魔の誘惑に屈したイヴが、アダム（男性）を墮落に導き、その結果、人間が楽園から追放されることになったという創世記の物語は、女性を悪と不浄に結び付けるものである。「魔女の槌」を書いたクラマーとシュプレンガーも女性が魔女となる根拠を聖書に描かれる女の特質（嘘つき、誘惑者など）に求めている。

エジプトの作家、ナワル・エル・サーダウィ（『イヴの隠れた顔』、『神はナイルに死す』の著者）はこのアダムとイヴの神話を男が女に対して抱く恐怖の物語と読む。キリスト教は女の受動性を賛美するが、それは裏を返せば、積極性や能動性を否定することである。サーダウィが言うように、アダムとイヴの神話を素直に読むなら、イヴの方がアダムよりも知的にも精神的能力でもはるかに優れていることが分かる。アダムはイヴの言いなりになるおとなしい男ただでなく、罪をイヴになすりつける卑怯な男でもあった。家父長制社会はこのような強い女性では具合が悪いので、積極的で強い女性であったイヴは男たちによって墮落の罪を背負わせられることになったのである。

「創世記」が示唆しているように、女性に対する男の根源的な恐怖は、おそらく性と関係がある。「魔女」の罪もその多くが性に関わりのあるものであった（たとえばインポテンツ、不妊、赤児殺しなど）。家父長制社会は性や再生産を女性自身にコントロールさせないために法や制度や宗教を作り出した。民間治療師が違法視されていくの

も同じコンテクストのなかにある。

民間治療師が魔女とされる例は多かった。薬草の知識に詳しく（中絶に対する罪は重かったから女性たちは薬草に頼ってひそかに堕胎をしなければならなかった）、産婆として実際に女性の身体に接してきた彼女たちは資格のある男の医師以上に優れた治療者だった。イングランドでは、1511年に資格の無い者が医業を営むことを禁止する議会法が制定された。それ以後は、村の「賢い」女が治療に成功すると、悪魔の助けによってそうしたのだと言われた。（これはエコロジーに対する近代科学の勝利とみることもできる。）

性に対する嫌悪は、ピューリタンの禁欲思想によって、さらに増幅された。清廉潔白と評判の高かった宗教者たちほど残酷な魔女狩り人となった事実が何よりもそれを証明している。（宗教改革は聖職者にも結婚を認めたが、あくまでも生殖としての結婚であって、エロスを抑圧したことには変わりはない。）ユダヤ教とキリスト教に起源をもつイスラムは、同じく父権制宗教ではあったが、性の快楽を求めることを罪だとは考えなかった。表面的には一夫多妻が公然とまかり通っていたアラブ社会は、性に関してはいかにも放縱な感じを受けるが、禁欲という名の陰に隠れて、実際はかつて無いほど売春が盛んだったといわれるキリスト教社会に比べて、ある意味では正直だったのかもしれない。ともかくイスラム社会では魔女狩りは起こらなかった。中世を通して支配的であったマリア崇拜が宗教改革以後影をひそめるのもプロテスタントの禁欲精神が社会を浄化し、「神聖な秩序」を確立するために、不浄と結び付く女性の「性」を排除したかったからである。

このように、女性たちが魔女狩りのいけにえとなったのは、なによりも、この禁欲思想が広めた性恐怖の要因が大きかった。この要因が上述のさまざまな要因と結びついた結果、ヨーロッパのあちこちに火刑の火が燃えさかったのであろう。

男からの逆襲

— 限らない女の墮落を前にして —

福島ひとみ

いささか旧聞に属するが、わが日本の東で西で、殺人列島ともよばれるべき事件が続出した。佐賀

の猟奇連続殺人、埼玉の連続少女誘拐殺人と、あらゆる層にわたる「女」が狙い打ちされ、その手口はこれ見よがしにマスコミを通して披露された。もちろん、「女」が猟奇殺人の犠牲にされるのは男権支配変態社会の特徴であるが、今回は年齢、職業などすべて無差別であり、犯罪は入念な計画のもとに断行された点で、新しい要素がある。

特に私は、埼玉の今野真理ちゃん宅に送りつけられた声明文なる「挑戦状」が母親宛であったことに着目しないではいられない。かつての誘拐を描いた映画「天国と地獄」では犯人と幼児の父親との電話による緊迫したやりとりが見せ場の一つであり、誘拐されたのが男児なら挑戦されたのも父親、攻撃のターゲットはあきらかに「男」であった。今回は誘拐して殺されたのが少女なら挑戦状を突きつけられたのも母親、テレビなどマスコミの取材に答えるのも一方的に母親で、父親なるものは影も形も見えないのである。真の被害者は、中年女性たる母親であるといえなくもない。当の母親たちもわが子がかくも残酷な殺され方をした上は臥せっていても不思議は無いのだが、堂々と取材に答える凶太さは相手にして不足はないといふべきか。

あらゆる層の「女」を狙い打ちにした一連の猟奇殺人は、「帝国の逆襲」ならず「男帝国の逆襲」ともいうもので、これら男たちの殺人の形をとったゲリラ的な逆襲は、昨今大流行のワガママ主婦がのさばる世相の裏の面を象徴している気がしてならない。アグネス先生も最近の中国情勢のカタムキで子連れ行商にアグラをかいているわけにもいかなかったようだが、次にくるのは松田聖子の離婚騒ぎだろう。彼女たちが現実の厳しさに気づかなければならないのが、ほかならぬ我々が生存するこの現実なのである。

消費の主役たる女の地位を押し上げたのは男の経済力であり、その意味で現在の女の幸福など、釈迦の掌で踊っている孫悟空の自己満足にすぎないのかもしれない、それに酔うものはやがて安っぽい酒によるアル中になるほかはないのである。

「女たちはルールを無視して横紙破りをやるほかに、自分の言い分を通すことができなかった」とは朝日の投稿欄における上野千鶴子氏の弁だが、私は、横紙破りで得るものよりも失うものの方が大きいと思う。横紙破りしかできなかったのも女であり、それは女の存在をいやしめ、地位をおと

しめてきた。長い目で見ると横紙破りは真の人間性の解放にとってマイナスに働きこそすれ、決してプラスには働かない。何が何でも正規の進軍をとオススメするわけではないけれど、ぬけがけ的な近道の方が景色も素晴らしく、体験も豊富であるとは誰にも言えまい。

歴史をかえりみれば、私たち女はみじめな存在ではあっても、権力奪取に狂奔する男たちのように墮落した存在ではなかったはずである。それが私たち女の解放をめざす者にとっては大きな誇りであり、驕りが過ぎてみずから墓穴を掘りつつある男のようにはなりたくないというのが合言葉であった。今はワガママ主婦がみずから墓穴を掘りつつある。

これは女性解放にとっては勝利どころか明らかな敗北であり、私たちはこの敗北の衝撃から立ち直れるかどうか定かではない。フェミニストはみずから敗北を認め、ワガママ主婦の暴走を食い止めることができなかった過去の戦略の無力さを笑うべきである。

ワガママ主婦の暴走に付随して、「彼女」たちを狙った男たちのゲリラ的な逆襲はエスカレートし、犯行の手口は陰惨をきわめるだろう。しかし私たちが恐れなければならないのはもちろんそんなことではない。

思えば女の歴史とは血と汗と涙で書かれたものであり、それは未来永劫続くのである。ある時点を境に急転換するほど歴史は甘くも安っぽくもない。過去の女たちが流した血と汗と涙よりもなお赤く苦く痛いものをるいりと流しながら、勝利の旗を男たちの手からみずからの智の力でもぎとりたい。

第三世界女性会議に参加して

—— 黒人女性神学との出会い ——

申 英子

5月のはじめに、第三世界神学者協議会（EATWOT）主催による「第三世界における第三世界の女性と第一世界における第三世界の女性の対話」という会議に参加する機会があった。

会場は黒人解放運動の指導者、故マルチン・ルーサー・キング牧師の生地でもあり、「風と共に去りぬ」のマーガレット・ミッチェルの故郷でもあるジョージア州はアトランタ市の大学のキャン

パスの一角で開かれた。EATWOTは70年代半ば頃より、白人（第一世界）優先型のキリスト教世界組織に対して、第三世界の神学者たちが、自らの主体で神学を形成しようと発足させたものである。（総幹事はナイジェリア出身のシスターである。）その後、一度女性たちだけによる集会を持つように計画されたが、地域集会はあっても、四大陸（アジア、アフリカ、南米、北米）の全地域より第三世界を代表する女性たちが集ったのはこれがはじめての試みとなった。

アフリカからはガーナ大学の宗教学の教授、ザイルのシスター、ナイジェリアの活動家、南米のペルーより出版関係者、アルゼンチンからは牧師。フィリピンの若い神学者、インドの神学生、在日韓国人の私という顔ぶれがアジアから。米国は黒人、ヒスパニック（キューバ人、メキシコ人）、ユダヤ人、中国人、韓国人等々の少数者グループという一応多彩な顔ぶれであった。

各地域における固有な社会環境の中に置かれている女たちの状況の報告に加えて、神学的な分析の発表がなされた。大会議式の集会と違って、小人数で深く語り合えたのがよかった。第三世界での女性たちの苦境はマスコミを通じて多く知ってはいるものの、現場の生の声をきくことは別のことであった。

弾圧下にあるペルーの代表は、夫が野党の国会議員であるため、本国から不幸な知らせでも来るのではないかと絶えず怯えていた。つい一週間前に、友人の国会議員が暗殺されたばかりという。アフリカの代表はインドのダウリー（女の側からの結納）による若妻の虐殺に耳を疑い、日本に在日韓国人問題があることに、ほとんどの参加者は全くはじめて聞くことだと驚いていた。

情報の交換という意味では、アジア系マイノリティーの発題は興味深かった。米国移民五代目の中国人というシュリー・ウォングは黒人の夫との間に生まれた1才の男児を連れての参加であった。儒教的な伝統をそのまま持ち込む移民集団の中にあっては、ワイフアビュース（妻虐待）が大きな問題であり、いくら人権擁護委員会があってもアジア系の女たちは進んで訴えることはしないという。新しい移民間では社会的抑圧のしわ寄せが家庭内暴力という形をとることは容易に理解できた。けれども、次のようなケースもあった。在米の韓国人女性（社会学を州立大学で教えている人）の一

人は、学会における白人女性学者の自分（東洋人女性）に対する差別的な言行態度に怒りながら「白人女性よりも韓国人男性の方がよりよく共働できる」と発言した。シスターフッド（姉妹の道）と言った言葉で片づけられない、男女、民族間の複雑な葛藤の一断面を知らされた。実は、私も日本における民族差別（性差別もからんで）に対する闘いの一番の協力者は男性である夫であると語ったのであるが。

多くの発題の中でも、特に私自身の関心は米国の黒人女性神学者たちの発言であった。Ph.D（博士号）をとり、大学で教えているというのかの女たちが怒りと悲しみをもって赤裸々に告発する態度は恨（ハン）とうらみに満ちて哀しかった。実をいうと、アトランタで黒人女性神学者に会えるというのが、この会に参加しようと決心した要因の一つでもあった。

日本で女性神学を学ぶといっても、翻訳されるものは白人女性のものばかりで、女性の視点を持って、男性優位の神学より脱皮せよ、といってもバルト神学的発想から解放されているものは少ないのが現状である。在日韓国人女性を第四（死）世界と呼び、抑圧神学を克服しようとしている私にとり、それらの書物を読んだ後味はあまり良くない。

マイノリティーとしての状況は似ているといわれる黒人女性たちはどう考えているのか。私が知り得たことを少し述べてみたい。『カラーパープル』で知られているアリス・ウォーカーの影響は文学界に留まらず、黒人女性神学にも深くかかわっている。「フェミニスト」なる言葉を極力さけて「ウーマニスト」を使用するのも彼女の主張に基づくものである。ウーマニストとはブラックフェミニストであり、性差別に対する黒人女性の闘いである。フェミニスト神学と黒人神学はそれぞれ、女性の人権、黒人の自由のための運動は担って来たが、黒人女性の多数の抑圧を言及するのには失敗している。黒人神学が黒人女性の立場を考えなかったようにフェミニスト神学は白人女性と黒人女性の歴史的関係について、ついぞ考慮して来なかった。ゆえにウーマニスト神学（Womanist Theology）は黒人女性のユニークな闘いから〈生き残ること〉と〈自由にされること〉を引き出す、性差別と人種差別の闘いを含んだものであるという。

かの女たちの神学的中心思想はキリスト論とい

うことが出来る。つまり、黒人女性としての経験を、(1)あからさまな抑圧に対する複雑さ、(2)その抑圧にも拘わらず、生きのこり、目的を達成しようとする能力を持つもの、とみると、黒人女性神学は、イエスを〈生き残ること〉と〈自由にされること〉を支える方、神と同一視される存在と見るのである。イエスの男性性は黒人女性の接手を拒む手助けをしたのは確かである。だから黒人神学のもつイエスの男性性から来る抑圧性を否定し、黒人女性がキリストの内に自分たちを、自分たちの中にキリストを見ることができかどうか問題となる。ナザレのイエスとキリストを彼女たちはわけて考える。すなわちイエスの男性性とキリストであることをわけている。キリストとしての神の受肉はナザレのユダヤ人の排外的な物理的な形を取っていないという。キリストの究極的な意義は肌の色や性別ではなく、黒人女性を支持し、解放する行動に基づくという。それはまた、黒人コミュニティ全体（男も女も含め）を、支え解放する運動のあるところはどこでも具体化されたキリストとして述べられるのである。「ウーマニスト」と「神学」の間を刺激的な関係にしているのはこのようなキリストの意義の再もくろみ(re-envisioning)である。ゆえにアリス・ウォーカーの「ウーマニスト」概念は黒人女性神学者が、神とキリストの臨在を黒人女性の生活の中に明確に系統だてて述べるよう挑戦していると言えるのである。

第四(死)世界の立場から私は神学的分析発題の中でイエスのユダヤ民族、男性性による女性への差別的態度について述べた。意図はキリストをあまりにも神格化させたドグマ擁護のキリスト教から、神の愛と正義を具体化させる愛する(loving)ヒューマニズムを主張するためであった。期せずして、黒人女性神学者のキリスト論は同じく神の愛と正義を実現するためイエスの男性性を超越して受肉したキリストを強調することにより、ヒューマニズムの実践を語っていた。「超越」と「糾弾」と形こそ違い、目指すことは同じなのだろうか。キリスト教文化の一端が家父長制を助長して来た東北アジアの状況の違いなのだろうか。アリス・ウォーカー自身は彼女の作品の中で既成のキリスト教思想を批判していることを考えるとき、黒人女性神学者たちがドグマからの真の解放を今後いかなる形で展開して行くのか知りたいと思っ

た。

日本で差別と直面していることを考えて、私が「あなたたちは白人女性とどう連帯して行くつもりなのか。本気に(seriously)考えているのか」と問うたとき、「それは今は考えられる段階ではない」と否定的な答えが返って来た。在日韓国人キリスト者として生きるには、少なくとも抑圧側にある日本人女性キリスト者とは連帯して行かなくては一步も進めない。マイノリティーといっても数千万人を同胞として持つかの女たちと何十人にもならない私たちの立場は何と違っていることか。神学の発展もこんな数の圧倒的違いに大いに左右されるのだと改めて考えさせられた。地球上の25%のみがキリスト教で、今や多元的宗教理解をぬきにしてはキリスト教神学が行きづまりをみせている今日、女性神学がどの方向をむいて進むべきなのか深く反省の機会を与えられた集会であった。

女性の会議に男性の通訳、ヘルパーが徹底してその役割を引き受けていたのも印象的であった。一月に日本で開かれた日・韓・在日の女性の会議では男性の手伝いも参加せず、通訳はなれ合いの女性が担い、通訳の役割をはみ出て、講師と反対のコメントまでつける身勝手さを経験したあとだけにとても新鮮であった。

さて、これからが……

岡崎 公子

この間の参議院議員選挙の結果で、少しは胸がスツとした。3月末頃、私がアルバイトに行っている会社に入出入りしている中年男性に「最近は何崎さんくらいの女性はどんなことを話題にするんですかね？」と訊かれた。私が「中曽根はいつ逮捕されるか、とか」というと「女性はスキャンダルが好きですからね、そういうのも一種のスキャンダルですからね」とその男性がいったので、私は天下国家を論じている正義の味方のつもりだったから、そういう受け取り方しかされないのかとムツとした。

そのうちこちらが呆れる程自民党の本音が暴露されるような失言（ではなく本音の発言）が飛び出し、本物のセックス・スキャンダルまでおまけの大サービスに出てきて、いくらお人好しの自民党大好きな国民でも、そのバカさ加減には付き合っ

ていられないという事になった。

消費税の事でも本気で国民は怒っているのに、ちっとも自民党は解っていないでグダグダと弁解するから、ミニ政党に投票したのでは票がわれて自民党に対するパンチにならないと賢い国民は票を社会党に集中させてパンチをくらわせることに成功した。

しかしこのパンチでフラフラとなった自民党が「このヤロー」と大反撃に出るか、あるいはこのパンチがやはりきいてノックアウト、政権交代になるか、さてこれから目が離せない。

臉の皮がたれ下がり、ほっぺたがずんだれたようなおジイ様方は人気が集まらない、とばかり「テレビ写りのよい」若手を総裁に選ぶのだとか。また私利私欲が第一目標の、名誉欲あふれた「ええカッコしい」じゃないでしょうね。

消費税が「今後何十年先を見越した高齢化社会の福祉の為の抜本的税法の改正にのっとった税」なんていうのはウソツパチだ。自民党を支えているお金が、働いて（その働きの内容も問題だが）所得が増えてもゴソッと税金にもっていかれる累進課税なんて不公平税制だ、と文句をいい出したので、自分達も金もうけが大事と思っている自民党議員も「ごもっともです」とばかり累進課税の税率をひき下げたのだ。そのしわよせが消費税となり庶民の財布を直撃し、買物する度に頭にくる主婦の支持を失ったのは当然のことだと思う。よくいわれた「車椅子に課税され宝石や毛皮の税率がグリーンと下がった」ことに象徴されている。何十年先の福祉まで見越せる程有能な政治家なら、なぜ税収が多くて豊かな現在の福祉をこんなに貧困にしておくのだ。寝たきりの老人の面倒をみる特別養護老人ホームは建てず、「在宅ケアの援助をする」などと一見オイシイようなことをいってごまかすようなお粗末福祉なのだ。（在宅ケアというのは結局家族の誰かが犠牲になって介護するということで、いくらパートのヘルパーが自治体から派遣されてきても限界がある。家族の願いはよくケアをしてくれる病院やホームに入れたい、ということなのだけど病院は老人を受け入れてくれず、良いホームは微々たる数で順番待ち二百番目とか三百番目などという絶望の状態だ）。現在の福祉もできない人達が来たるべき高齢化社会の為の税法なんていっても全く信用できない。

このように労働者や農民からの資本の搾取を強

化しようという目的の税制改正だったのだが、もう一つは軍事大国化という目的もある、と私は思う。その路線を着々と敷いたのは中曽根サンで、リクルート事件も株のばらまきで、1万円のお金も汗水たらさなければ稼げない庶民を尻目に、1週間寝ていても何百万というお金がころがり込むという事実が許せないという事もあるが、もっと大きいスーパーコンピューターなどからむアメリカがらみの大汚職があると、私みたいな普通の国民でも感じている。その汚職はさらに日本の軍事費をどんどん増やして、アメリカの期待に応えます。どんどん武器を買わせて頂きます。そうすれば貿易赤字も改善するでしょう。日本国内の軍需産業もどんどん発展させて肩代わりして頂いている防衛も自分でするようにします。などという約束としっかり絡んでいると思われてならない。

中曽根サンが逮捕されなかった事でかえって賢い国民は解ってしまった。女性蔑視、農民蔑視、弱者蔑視で強者の為の政治をして軍事大国になろうとしているのだ、と。彼は着々とその路線を敷いていたのだ、だから消費税も出てきたのだ。

農業についていえば、見かけの良いチャラチャラと美しい職種で、汗水たらさず手を汚さずいい恰好しているだけで収入の良い仕事（実際はそんな仕事があるわけではないのに、リクルート事件などでそういう仕事があるように一見幻想を抱かせられる。又政治家が自分達の利益を優先させた為に土地の値段が上がるのにまかせた。それで労せずして巨額のお金を手に入れる人が出たことは事実なのでそういう一獲千金を求めるのか）を求める若者が増え、農業を支える人々がいなくなりそうなのだ。そういう危機的状況にいる人々をさらにぶっ倒すような政策をとる。休耕田政策だけでもひどい、国土を荒廃させると思ったのに日本から水田をなくす政策を進めるとは。

どこの国だって食糧は自給自足を目標に必死になって守ろうとする最も根本的なものだ。自給自足で全国民が飢えないようにと考えるのが大前提なのに、今の真剣さのない農業政策はどういうことなのか。国民が怒って当たり前だと思う。

等々、政治のことを考え出すと言いたいことがいっぱい。（もっと大きくは地球全体の運命ということがあって、私たちの日常生活の消費と環境問題というのがあるのだけど。）この不平不満を来年の衆議院議員選挙にまたぶつけよう。そして

女性パワーもファッションで終わらないよう賢く持続しなければと思っているこの頃です。

連帯と希望の歌を！

岩田 澄江

この春から夏へといろいろなことがあった。この国の政治の狂乱と空白は、豊かさの中での弛緩がどのようなものでありうるかを、いやおうなく見せつけた。首相のいわゆる「女性問題」には、恥かしい思いがついてまわった。そうこうするうちに美空ひばりが重病で亡くなり、今度はマスコミがそちらでもちきり、首相が賞をあげたりして、これも「女性」のなだめ方の一つかと、かんぐったりしたものだった。

とに角、小さな列島の中で、日本が興奮して、国をあげて騒いでいる間も、日本よりはるかに豊かでない国々で、悲惨なことが起こり続けている。飢餓や累積債務やアパルトヘイトや戦争や難民や…、これらのことは私たちから遠く離れた所で起こっているように思われるのだが、この「経済大国」は「経済」という点で、世界のあらゆるこうした問題と結びついている、というのが事実である。

革新政党が躍進をとげたことが、私たち一人一人の利害や、議会政治のバランスにとって望ましいだけでなく、今あげたような世界の苦しい現実にも手をさしのべる、私たちの姿勢のあらわれであってほしい、と切に願う。

最近必要があって、ソウェトに住む南アフリカの女性作家、ミリアム・トラーディの短編集を読んだ。黒人女性として、アパルトヘイト体制の中で黒人男性よりもっと差別、抑圧を受けている女性たちの、苦しい生活が描かれている。それらの作品の中の一つで、私は息をのむ思いをした。それは女遊びをする夫について、私がかから追われたり、彼が出て行ってしまわない限り、彼が外で何をしようが機嫌よくしてくれればかまわない、と言う妻に対して、その夫に一方的に目をつけられた若い女性が、貴女のそういう考え方は利己的だ、私だって感情をもった人間なのに、その私について貴女は一体どう考えているのか、単に夫の玩具と思っているのか、とはっきり面と向かっていう。

私たちの宰相婦人は、元芸者であった人の告発

という問題に対して、黙し続けた。首相の方はいろいろ(当然のことながら)責められたが、夫人に対してこのような視点を私たちはもったのだろうか。作品のうえでとはいえ、女同士の率直な対話と、そこから生まれる真の理解を描いたトラーディの姿勢に、私は胸をつかれた。

南アフリカの反アパルトヘイトの闘いの中で、今男たちよりもむしろ子どもたち、女たちが、より苦しい闘いの場に置かれているときく。女性の連帯なくして、そのような闘いはできないだろう。黒人女性だけでなく、カラードの女性はもちろん、白人女性との間にもまれには連帯が存在していることは、「ワールド・アパート」という映画にも、少し古いが実話として描かれていた。それなのに日本人は南アフリカで「名誉白人」という特権的・屈辱的立場に甘んじ、日本では女性たちが南アフリカのプラチナや金やダイヤモンドのアクセサリを買いまくっている。黒人たちが経済制裁を願っているにもかかわらず、日本は南アフリカにとって、第1位の貿易相手国である。

かつてアフリカン・アンセムという、アフリカの多くの国で国歌のように歌われている、美しく、力強い歌を南アフリカの女性たちがうたうのを聞いたことがある。それは魂の底から滲み出す、叫びのような歌だった。ここで唐突な連想と思われるかもしれないが、美空ひばりは、こういう歌が本来ならば歌える人だったのではないか、という気がする。彼女の歌に多くの人が涙し、それゆえにこそ、あれだけその死が多くの人に惜しまれたのだと思うが、ただ悲しみとか、ため息とかだけでなく、心の底から溢れる喜び、感動、連帯、愛、希望、そういったもろもろの私たちのプラスの感情、肯定的な想いを歌いあげてもらいたかった、と思う。

米国に滞在していた間出席していたカルフォルニアのクエーカーの集会では、毎日曜の朝、沈黙の礼拝の前に、歌いたい人が集まって、お互いのリクエストで次々に合唱した。クエーカーは歴史的に、賛美歌もうたわないという地味な教派なのだが、カルフォルニアの明るい空の下では、いささか事情がちがっていた。歌われる歌はいつも心が高揚するような歌で、力と希望がわいてくるようだった。あのジョーン・バエズもメンバーで、彼女の声に加わると、ハーモニーはひととき美しくなるのだった。歌詞はたとえば「たとえ身は獄

にあらうとも、人の思想は自由である！」とか、「平和を河のごとく流れしめよ」とか、想い出しても心たかまる懐かしいものばかりである。そして高みへ高みへと昇っていくようなメロディー。

日本へ帰ってから、そのように心躍る想いをする機会がとみに少なくなってしまった。淋しく悲しく、うつむいてため息ついて……というのがどうも日本の心情のようで、私たちはなぜか積極性に欠けている。祭りのようにワッと精神を解放させる機会も、都会住いではディスコにでも行かない限り、ほとんど恵まれない。このようなあり方は、精神の健康状態にとってよくないのではないだろうか。何かあると雪崩のように一方向に向かってつつ走る、私たちの国民性は、こうした日常的な欲求不満の積み重ねにもその一因があるのではないか。

とりとめもなく書き記したが、本当に精神の底から私たちが自由に元気に、喜びと連帯をもって生きていくにはどうしたらよいのか。このことの方が浅薄でわけのわからない「国際化」とやらより、余程大切なことである。

(p 3 から続く)

を中央と周辺とに分け、周辺が中央にゆさぶりをかけられるだろうかというような実効性、即効性を求めず、それぞれの場でまず始めることと思います。

私は今トランス・パーソナル心理学に興味を感じています。この取り組みは西洋の心理学が仏教を初めとする東洋の思想を見直したともいえると思いますが、私はやはり仏教は正しい教えなのだと誇るより、逆にこういう動きに対応できない日本仏教の閉鎖性を感じました。問題は教学用語でなしに、自分の実証したところから自分の言葉で「根本的なもの」へいたる実践的な方法が確立されていないことです。だからでしょうか、トランス・パーソナル心理学が治療の方法として着目しているのは座禅よりは上座部仏教やチベットの瞑想、インドのヨーガではないかと思います。やはり身をもって実証することと、そこへ至る方法を明確にしないと日本の仏教はますます取り残されるばかりでしょう。女性は同じ土俵で言葉の批判ばかりしていないで、新しい分野へどんどん出てみたらと思いますが、日本の女性達にその気運が見えないようですので、とりあえずグロスさんの取り組みに期待をかけてみたいと思います。

会計報告（関西） 1989.5月末現在

収入		支出	
前年度繰越し	14,565	印刷代	189,750
会 費	210,000	郵送費	52,060
冊子売り上げ	180,190	文具代	7,405
カンパ	12,280	コピー代	6,030
シンポ参加費	23,600	謝礼	14,000
		会場費	8,280
		その他	4,680
収入合計	440,635	支出合計	282,205

現在高 158,430

会計報告（関東） (1988.1～1989.5)

収入		支出	
前年度繰越し	25,090	印刷代	167,000
会 費	163,000	郵送費	37,710
冊子売り上げ	87,990	文具代	1,930
シンポ参加費	15,000	コピー代	2,866
		謝礼	24,000
		その他	980
収入合計	291,080	支出合計	230,486

現在高 60,594

あとがき

以下の方々が新たに会員となりました。

曾我智子、江口みりあむ、クロフォードリンダ、平田道子、中島美幸、野本千津子、加藤典子、大沢民子、マッシューズ道子、中山庸子、薄井篤子、下田妙子、岸沢初美、黒田律、平野茂雄。

この会が発足してから4年経ちました。関東では3カ月毎に例会をもっていますが、まだお会いしていない方々も大勢いらっしゃいます。そこで提案があります。一度合宿をしませんか。西から東からも集まりやすい場所で、一泊ぐらいで、この会に対する思いや宗教、フェミニズムについて日頃考えていることなど、じっくり話し合うというのはどうでしょう。会員のみな様のご意見をお聞かせ下さい。(A. O.)